

# インターンシップへの参加が学生の意識の変化に及ぼす影響

The participation in internship have an influence on the change in attitudes of student

本田 周二<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学人間関係学部

Shuji Honda<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：インターンシップ，アクティブラーニング，教育効果

Key words : Internship, Active learning, Educational effect

## 抄録

本研究では、インターンシップの教育効果にはアクティブラーニングに関連するものが含まれていると位置づけ、参加者の満足度や社会人に求められる資質・能力といった従来の研究で扱われてきた変数だけでなく、多様な側面（アクティブラーニング(外化)尺度、学業と職業の接続に対する意識）からインターンシップの教育効果を明らかにすることを目的とした。大学生を対象としたプレ・ポスト調査を行い、分析を行った。その結果、アクティブラーニング(外化)尺度については、インターンシップの参加前後で有意な変化は見られなかった。一方、学業と職業の接続に対する意識や社会人に求められる資質・能力に関しては、インターンシップの参加前よりも参加後の方が有意に得点が上昇していた。インターンシップへの参加が学業と職業の接続意識を高め、自身の自信を高める可能性が示唆された。今後は、インターンシップのプログラムや参加者の参加動機等によって分類した上で、教育効果を見ていくことにより、学生、大学、企業の三者にとって有益なインターンシップのあり方を考えていくことが重要であろう。

## 1. 問題と目的

インターンシップとは、学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関する就業体験を行うことである(文部科学省)。近年、政府の方針に伴い、日本全国の大学においてインターンシップの普及に関わる取り組みが数多く行われるようになってきている。山田<sup>[1]</sup>によると、2014年度の調査において、大学生の11.8%がインターンシップを体験していることが明らかとなっている。しかし、その教育効果については社会人基礎力や資質・能力、参加者の満足等に注目するものが多く、まだまだ議論の余地が残されているようにみえる。

インターンシップの教育効果を考えるうえで、インターンシップで学生たちが行っている活動に着目することは重要であろう。インターンシップの多くは、企業内の見学にとどまらず、企業から与えられた課題について自分なりの解決策を考え発表することが多い。また、複数人のインターン

シップ生と企業の担当者がディスカッションをすることも良く行われている。これらの活動を行うことによって鍛えられる力とはどのようなものだろうか。本研究では、これらの活動をアクティブラーニングとして捉えることを試みる。

アクティブラーニングとは、溝上<sup>[2]</sup>によると「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義されている。具体的には協同学習、PBL、反転授業などで用いられており、主体性や他者との協調、ディスカッション、プレゼンテーションを求められることが多い。これは先ほどのインターンシップで学生たちが行っている活動とほぼ同様のものであると考えられる。よって、得られる教育効果も同様のものを想定できると判断した。

そこで、本研究では、インターンシップの教育効果にはアクティブラーニングに関連するものが含まれていると位置づけ、参加者の満足度や社会人に求められる資質・能力といった従来の研究で扱われてきた変数だけでなく、多様な側面からインターンシップの教育効果を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象者

地方国立大学の学生(学部1年生～修士1年生)を対象に調査を行った。プレ調査では、161名(男性75名、女性85名、不明1名)、ポスト調査では、76名(男性36名、女性39名、不明1名)が調査対象であった。プレ調査、ポスト調査ともに回答したものは37名(男性21名、女性16名、平均年齢20.6歳、 $SD=0.98$ )であった。

### 2.2. 調査時期

プレ調査を2016年5、6月に、ポスト調査を2016年10～12月に実施した。プレ調査は事前ガイダンス、ポスト調査は事後ガイダンスの時間の一部を使用して行った。

### 2.3. 調査内容

#### 【プレ調査】

1) インターンシップへの参加動機：インターンシップへの参加動機についてたずねるものである。「就職希望である業種について知りたい」「自分の向いている職業や業種を見極めたい」「働くことがどのようなことなのか知りたい」「自分の足りない部分を知りたい」「今後の学生生活の目標を明確にしたい」「大学での勉強と社会のつながりを見つけないか」との6項目について5件法(当てはまらない～当てはまる)で回答をもとめた。

2) アクティブラーニング(外化)尺度：溝上ら<sup>[4]</sup>が作成した尺度を用いた。「根拠を持って他者に自分の意見を言う」「他者に自分の考えをうまく伝えられる方法を考える」「議論や発表を通じて自分が何を考えていたのかを理解する」の3項目について、現在、どの程度自信があるのかについて5件法(自信がない～自信がある)で回答をもとめた。

3) 学業と職業の接続に対する意識：半澤・坂井<sup>[4]</sup>が作成した尺度を用いた。大学での学びと仕事との関連について測定する項目である。「大学での学業は就職の試験突破に必要なものである」

「大学での学業は将来の仕事の実践に生かすことができる」「大学での学業と将来の仕事の内容は関係している」など7項目に対して、今の自身の考えに合っているかどうかについて5件法(全く当てはまらない～とても当てはまる)で回答をもとめた。

4) 働くことに対するイメージ：あなたにとって働くことに対するイメージがどのようなものであるのかについて自由記述にて回答をもとめた。

5) 社会人に対するイメージ：あなたにとって社会人に対するイメージがどのようなものであるのかについて自由記述にて回答をもとめた。

6) 社会人としての資質・能力：社会人としての資質・能力についてたずねるものである。中国・四国地域人材育成事業大学グループ会議・中国経済連合会<sup>[5]</sup>によって用いられた項目のなかから10項目(「基本的なマナー、礼儀、態度を身に付けている」「言われる前に自ら考えて行動する」「自分の考えをわかりやすく説明し伝える」など)を抜粋して用いた。現在、どの程度自信があるかどうかについて5件法(自信がない～自信がある)で回答をもとめた。

【ポスト調査】プレ調査でたずねた項目のうち、インターンシップへの参加動機以外は同様の内容をたずねた。それに加えて、以下の4つについてたずねた。

1) インターンシップの参加先、実施期間：インターンシップの参加先(企業、法人等、官公庁等)、実施期間(1週間以内、2週間以内、2週間以上)についてたずねた。

2) インターンシップに参加した回数：これまでのインターンシップに参加した回数についてたずねた。また、そのうち、1日のみのインターンシップに参加している場合は、別途回数をたずねた。

3) 参加に対する満足度：インターンシップの満足度について「不満」「どちらかといえば不満」「どちらかといえば満足」「満足」の4件法で回答をもとめた。

4) インターンシップで得られたこと：インターンシップに参加したことによって得られたものについてたずねるものである。「働くこと自体(厳しさ、やりがいなど)への理解」「仕事内容への理解」「仕事への興味・関心」「コミュニケーションの重要性」「主体的に取り組むことの重要性」「マナーや常識の重要性」「大学での学習意欲」「自分に足

りないものへの理解」「その他」のうち、当てはまるものすべてに○をつけてもらった。

### 3. 結果および考察

本稿では、働くことに対するイメージ、社会人に対するイメージ以外の変数について報告を行う。

#### 3.1. インターンシップへの参加動機、参加先、参加期間、参加に対する満足度について

インターンシップへの参加動機をまとめた結果、1位「自分の向いている職業や業種を見極めたい」、2位「自分の足りない部分を知りたい」、3位「働くことがどのようなことなのか知りたい」の順であった。自分に合った仕事に就きたいという学生の気持ちが表れているものと考えられる。また、足りない部分を知りたいという自身の成長につなげたい意欲の高さも表れていた。

参加先としては、企業(51名)、法人等(7名)、官公庁等(13名)であり、多くの学生が企業にインターンシップに参加していることが明らかとなった。参加期間は、1週間以内が60名、2週間以内が9名、2週間以上は1名のみであり、多くの学生が5日間以内のインターンシップの参加にとどまっていることが明らかとなった。

インターンシップに参加したことに対する満足感としては、不満(1名)、どちらかといえば不満(3名)、どちらかといえば満足(27名)、満足(40名)であり、ほとんどの学生はインターンシップでの体験に満足しているようであった。

#### 3.2. インターンシップで得られたこと

インターンシップに参加したことについてまとめた結果、1位「働くこと自体(厳しさ、やりがいなど)への理解」、2位「コミュニケーションの重要性」、3位「仕事内容への理解」であった。学生はアルバイトの経験はあるが、企業で働く経験は初めてのことであり、それが結果に反映されていると考えられる。インターンシップへの参加動機として3位に「働くことがどのようなことなのか知りたい」があげられており、実際に参加したことによってこの動機が満たされたものと考えられる。また、コミュニケーションが重要であることを確認できたことは学生にとって有益だったのではないだろうか。

#### 3.3. インターンシップへの参加と学生の意識との関連

インターンシップに参加したことが学生の意識

にどのような影響を与えたのかどうかについて検討するために、アクティブラーニング(外化)尺度、学業と職業の接続に対する意識、社会人としての資質・能力について対応のあるt検定をおこなった(表1, 2)。分析の結果、アクティブラーニング(外化)尺度に関しては、有意な変化は見られなかった。学業と職業の接続に対する意識に関しては、プレ調査時( $M=3.15$ )よりもポスト調査時( $M=3.44$ )の方が5%水準で有意に高かった。効果量としても、0.28であり、インターンシップにより学業と職業の接続に対する意識が高まることが明らかとなった。項目ごとに見ると、「大学での学業は就職する際に求められている内容である」の効果量が0.38と最も高く、次いで、「大学での学業は将来の仕事を展開するのに役立つものである( $d=0.33$ )」、「大学での学業が将来の仕事の理解と関係している( $d=0.31$ )」の効果量が高かった。この結果は、インターンシップが就職活動と密接にリンクしていることを示している。

最後に、社会人としての資質・能力について述べる。分析の結果、有意傾向ではあるが、「基本的なマナー、礼儀、態度を身に付けている( $d=0.35$ )」、「専門的な知識・技能を身に付けている( $d=0.30$ )」の2項目についてポスト時点での上昇がみられた。近年の大学では、社会人基礎力に代表されるような社会に出た後に求められる力について、初年次の段階から教育されることが多くなっている。そこでの学びの成果が、インターンシップ先においてあらわれているのかもしれない。また、「専門的な知識・技能を身に付けている」の数値も上昇していた。この点は、理系・文系による違いやインターンシップ先の企業とのマッチングによって違いが見られると考えられるが、大学での学びがインターンシップ先において有用であると感じられるような経験を積んでいるものと考えられる。この結果が、学業と職業の接続に対する意識に高まりに影響している可能性がある。

#### 3.4. 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題と展望について述べる。まず、分析対象者の数の少なさがあげられる。本研究ではプレ調査とポスト調査双方に回答した対象者が37名しかいなかったため、分析結果の解釈には慎重になる必要があるだろう。もっと多くの対象者に調査を行い、結果の頑健性について検証していく必要がある。次に、分析対象者の分類についてで

ある。本研究では、分析対象者の少なさもあり、全員をまとめて分析している。しかしながら、プレ調査でのインターンシップ参加動機や参加先、参加期間などによって得られる教育効果が異なる可能性は高い。分析対象者の分類した上で、教育効果について検証していくことが重要であろう。ここ数年でインターンシップに参加する学生、実施する企業が大幅に増えてきている。大学が教育の一環としてインターンシップを位置づけ、学生、大学、企業の三者にとって意味のある試みとするためにも、インターンシップの教育効果について更なる検討を行っていく必要があると考えている。

### 付記

本研究は、平成 28 年度大妻女子大学「戦略的個人研究費」(S2807G)の助成を受けた研究成果の一部である。なお、本研究の一部は、日本心理学会第 81 回大会において報告している。

### 引用文献

- [1]山田総一郎. インターンシップのプロになる!. 悠光堂, 2015.
- [2]溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂, 2014.
- [3]溝上慎一ほか. Bifactor モデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発. 京都大学高等教育研究. 2017, 22, p.151-162.
- [4]半澤礼之ほか. 大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応 - 自己不一致理論の観点から -. 進路指導研究. 2005, 23, p.1-9.
- [5]中国・四国地域人材育成事業大学グループ会議(幹事校: 島根大学)ほか. 「中国・四国地域における就業能力形成に関するアンケート調査」の集計・分析報告書. 2014.

(受付日: 2018 年 4 月 23 日, 受理日: 2018 年 7 月 12 日)



表1 プレポスト分析結果(AL外化, 学業と職業の接続に関する意識)

	プレ調査		ポスト調査		n	t	p	d
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				
根拠を持って他者に自分の意見を言う	3.22	1.25	3.27	1.12	37	0.24	0.82	0.05
他者に自分の考えをうまく伝えられる方法を考える	3.24	1.23	3.35	1.06	37	0.47	0.64	0.09
議論や発表を通じて自分が何を考えていたのかを理解する	3.32	1.00	3.35	1.03	37	0.11	0.91	0.03
AL(外化)尺度得点	3.26	1.05	3.32	0.90	37	0.32	0.75	0.06
大学での学業は就職の試験突破に必要なものである	2.97	1.28	3.46	1.30	36	2.12 <sup>*</sup>	0.04	0.38
大学での学業は将来の仕事の実践に生かすことができる	3.14	1.23	3.41	1.12	37	1.08	0.29	0.23
大学での学業と将来の仕事の内容は関係している	3.14	1.23	3.35	1.25	37	0.83	0.41	0.17
大学での学業は就職する際に求められている内容である	2.76	1.23	3.24	1.30	37	1.84 <sup>†</sup>	0.07	0.38
大学での学業が将来の仕事の理解と関係している	3.03	1.26	3.41	1.17	37	1.54	0.13	0.31
大学での学業は就職する可能性を高めるものである	3.57	1.28	3.43	1.30	37	0.45	0.66	0.10
大学での学業は将来の仕事展望するのに役立つものである	3.41	1.17	3.78	1.11	37	1.43	0.16	0.33
接続意識尺度得点	3.15	1.03	3.44	1.07	36	1.59	0.12	0.28

表2 プレポスト分析結果(社会人としての資質・能力)

	プレ調査		ポスト調査		n	t	p	d
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				
基本的なマナー, 礼儀, 態度を身に付けている	3.14	1.11	3.51	1.04	37	1.83 <sup>†</sup>	0.07	0.35
言われる前に自ら考えて行動する	3.22	1.00	3.11	0.91	37	0.66	0.51	0.11
自分の考えをわかりやすく説明し伝える	3.08	1.14	3.19	1.10	37	0.54	0.59	0.10
新しい課題や困難な課題にチャレンジする	3.35	1.11	3.24	1.12	37	0.55	0.59	0.10
幅広い知識・教養を身に付けている	2.59	0.99	2.70	0.85	37	0.61	0.54	0.12
自分のしたこと, 言ったことに責任が持てる	3.65	0.89	3.49	0.90	37	0.95	0.35	0.18
何事にもやる気, 意欲を持って取り組もうとする	3.81	0.88	3.76	1.01	37	0.35	0.73	0.06
チームをまとめ, 引っ張っていく	2.81	1.24	2.84	1.19	37	0.13	0.89	0.02
前例に縛られず, 独自のアイデアや方法で問題解決できる	2.89	1.14	2.89	1.17	36	0.00	1.00	0.02
専門的な知識・技能を身に付けている	2.59	1.24	2.92	0.92	37	1.78 <sup>†</sup>	0.08	0.30

## 本田 周二 (ほんだ しゅうじ)

現職：大妻女子大学人間関係学部人間関係学科社会・臨床心理学専攻専任講師

東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程修了。

専門は社会心理学。現在は友人関係に関する社会心理学的研究と同時に、アクティブラーニングやキャリア教育に関する研究を行っている。

主な著書：公認心理師必携テキスト（共著，学研メディカル秀潤社），アクティブラーニング型授業としての反転授業 - 理論編 - （共著，ナカニシヤ出版）